

# 大隅加治木同鄉會

第一號

明治四十年八月十五日發行

# 桜城雑誌第壹號目次

口 繪

○加治木全景(寫眞銅版)

發行趣旨

○桜城雑誌發刊の趣旨

島 津 久 賢

祝 辭

○鹿兒島縣知事千頭清臣 ○第七高等學校造士館長岩崎行觀

○鹿兒島新聞社 ○鹿兒島實業新聞社 ○加治木稅務署

長竹下敬 ○宮山縣知事川上親晴 ○海軍大佐新納時亮

○議院議員柳木慶二 ○海軍機關大佐木佐木幸輔 ○加治木

村長上村與八 ○桜城女子高等小學校長上野喜之助 ○東京

毎日電報記者枝元長夫 ○鹿兒島新聞社加治木支局員本田克

○伊文館長貴島佐吉 ○有爲舍長濱田彥藏 ○青雲舍長岩城

豊次 ○加治木小林喜製長池溥定

論 説

○本誌發刊の經歷 ○島津男爵の家庭 ○扇和園 ○製絲場櫻島館 ○鹿兒島授產學校加治木分教場 ○學事

一班 ○小學校 ○中學校 ○同盟教育會 ○教育者の譽

○中馬翁の精勤と村人の美舉 ○婦人會 ○勅題預選

者 ○入學と卒業 ○村治一班 ○農家の副業 ○村有殖

林 ○時報館 ○錦江義會 ○支局設置 ○本年の農作

農事功勞者 ○在鄉軍人會 ○官祭招魂社へ合祀 ○日

露戰役殊勳者 ○日露戰役忠死者

訪 問

○加治木同鄉會規則(並細則) ○加治木同鄉會基本金寄附者姓名錄(一)

枝 風

○前編 ○後編 ○沖繩の子さ

史 傳

○鶴尾謹親氏之談 ○沖繩雜感

墨 座 居 士

○廣告 ○祝電 東京第一部長小濱松次郎

同 士

○廣告 ○祝電 東京第一部長小濱松次郎

五 二

四 一

三 一

二 一

一 一

通 信

○在清國落合兼稜君よりの通信

詞 藻

○漢詩 ○新体詩 ○俳句 ○和歌

漫 言

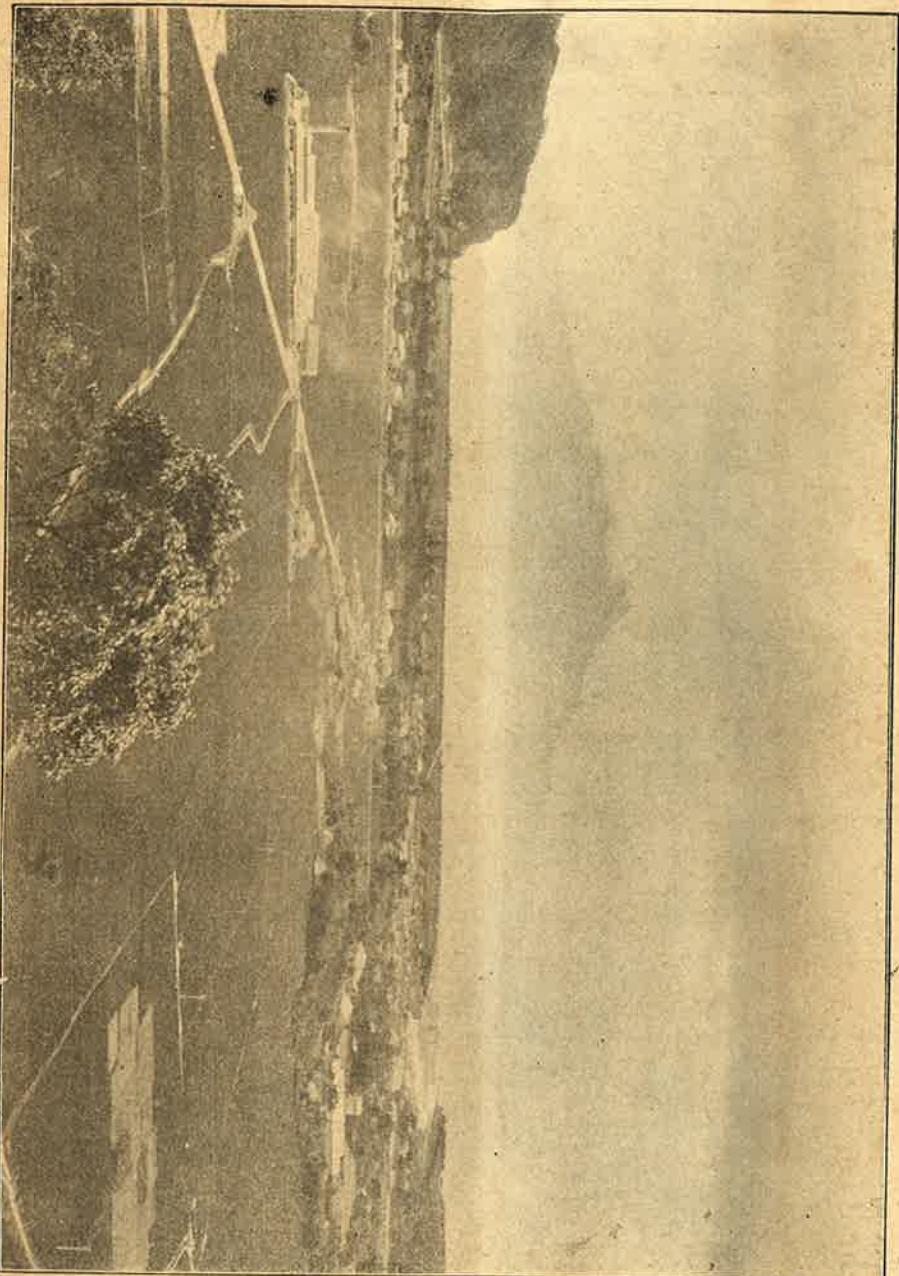
○國教風に就て

雜 誌

報 告

一 一

加 治 木 全 景



桜城雑誌第一號

雜誌發刊の趣旨

惟ふに一郷の榮枯消長は、即ち一國の盛衰興亡なり、然り一國の隆興を圖らんこ欲せば、一郷の進運發展を圖らざるべからず、一郷の發展を圖らんこ欲せば、先づ郷友相互の親睦和合を期せざるべからず、換言すれば吾等同郷人が、自他の交誼を永久に維持し、我郷將來の福祉を、益々進捗せしめんこ欲せば、吾等の智識を交換研磨し、氣脈を流通貫穿すべき、一の機關なかるべからず、是れ吾等が雑誌「桜城」の發刊を企つる所以也。

從來我郷には右の如き機關を有せざりしが爲めに、如何なる人物が郷國に活動し、如何なる人物が四方に雄

飛しつゝありや、或ば眼前の事項、或は他郡村との關係、或は縣下に於ける我郷の地位、其他商に、農に、工に、吾等は之に關して一も知る所あらず、加之先輩と後輩との聯絡は奈何、又内外に在る同郷人間、意思の疏通如何、謂ふに至ては、吾等は殆んど暗夜の感を抱かざるを得ざるなり。

我郷は縣下屈指の都會にして、海に陸に交通の便宜を有し、天與の地利鮮なしと謂ふ可からず、尤も彼の鐵道開通の爲め、實業界の一部に多少の打撃を及ぼせし憾みは免かれざれども、之に對して毫も悲觀することなく、今後益々文明の利器を利用して、忍耐と勤勉とを以て、向上活動せんには、更に幾層の實益を見る、蓋し亦疑ふ

を要せざるなり。

言ふまでもなく、社會は生存競争の舞臺にして、優勝劣敗の戰場なり、今や我が國運愈々進み、聲譽益々揚るご雖ども、之を歐米各國の進歩に比せんが、猶遲々たる牛歩の感なくんばあらず、文化の開進、國力の發展は、之を自然に待つべからず、必らずや、人々自ら其職務に忠實にして、精神に、智識に、身體に、平素修養鍛錬するにあらずんば、到底時勢は我を驅りて、彼と對峙するを許さざる事明なり、由是思之吾人豈夫れ奮起せずして可ならんや。

吾等は徒手機會を待たず、進んで人力を以て天然を利用する方法を講じ、あらゆる機會を作るべく、茲に同郷

鄰保相團結して、男女ごなく、長幼ごなく、學生ごなく、紳士ごなく、互に相提携し、互に相砥礪せば、之を小にしては以て一郷の福利を増進すべく、之を大にしては以て國家富力の源泉たるに足らん歟。

嗚呼、我同郷の諸子よ、時運の趨勢に推されて產出せる、「松城」の前途が、如何に多望にして、又た多福なるかを察し、希くば吾人の微衷を酌み、奮て本會の會員となり、本會の成立發達を贊助せられんことを、聊か所信を叙して發刊の辭こす。

明治四十年八月

發起人總代 島津久賢

## 祝詞

### 雑誌桜城の發刊を祝す

國家の進運隆興を促すに切實なる機關は新聞雑誌にありことに於てか國の文野をトするに至るの數の多寡を以てすることのいはれなきにあらざる事を知るなり

現今我國に於る發刊新聞雑誌の數固より多からずとせず東京府は更にもいはす縣にしても多きは十九種以上を有し少なきもなほ五種以上より月刊雑誌を出すもの多し然るに我が縣の僅かに二種以上に出でざるを知らば誰れか感慨の念なきものあらむ

この時に當り雑誌桜城の發刊を見る誠に慶祝すべきなり  
今や、我國益々文化の發達國運の伸張を圖るの時に當り之を善用して其實効をあぐるを謀らばろの國力發展の上に貢献する少なからざるは疑ふべからず故に余は其發刊を祝するどもにろの健全なる發達を望むと云爾

鹿兒島縣知事 千頭清臣

### 祝辭

往昔桜城公子温粹の徳雄文の資を以て内は一藩を率ゐる外は名流に接し桜城の名四方に高し明治中興王綱維れ張り茲に四十年桜城の名未だ甚た世に顯はれ是何を以て然るや余を以て之を觀るに蓋し其人などに非す人を造る機關なきなり適々桜城の諸有志時勢に感する所あり衆心を協せ衆智を導き人心の萎靡を刷新して時勢に後れざらんことを期して加治木同郷會を新設し桜城雑誌を發刊して之が機關となさんと欲す善い哉有志の擧や余は諸子の着眼を高しつし當今必須の擧として之を迎ふるに躊躇せざるなり

近者我邦老清の冥を啓き強露の威を挫き國光の發揚と共に世界諸強國の驚駭と嫉視とを來せるは勢の

當然なり識者は士氣の養成國力の充實を以て一日を経ふす可からずとなす此時に當て退要袖手桃源の夢を貪り或は區々小利害に拘泥し進んては宇内の形勢を察し退ては國力の充實に資する能はざるもの

は實に昭代の罪人にして興國の士民に非ざるなり

善い哉柁城發刊の舉や余は信す柁城人士此より協力發憤して止まざらんか人材輩出し面目一新し實に時運に後れざるのみならず進て興國の氣運を助け國力の發展に資するものあるや必せり是時に當り柁城の名再び天下人士の眼眸に映し腦裏に印するもの彼の柁城公子の當時に優るものあらん是豈方々柁城人士の名譽にして又實に其希望する所に非るか乃ち茲に所思を吐露して柁城發刊の前途を祝すと云ふ

## 第七高等學校造士館長 岩崎行親

### 祝詞

旺洋たる蒼海も滴々の水これが素を爲し巍峨たる高山も一坏の土より成る零細の微たりとて輕忽に附するは宇宙進化の大法人類發展の天則を無視するの甚だしきもの矧んや國家社會の森羅萬象は生々存々頃刻も止まざるの性質を帶びて進まざれば退き中道に停滞せざるを其本相とするをや。

余輩今島津久寶男を始め柁城の天地に關涉ある有志諸君が近著切に感する處のものありて柁城雑誌といふを新に發刊されんと殊に鄉党相親むの主義に由りて互に識見の交換を行ひ德性の練磨に資して一村發達繁榮の基礎を培養するを窮竟の目的とせらるゝに至りては豈に大白を泛べて祝せざるを得んや。

柁城の地位たる魔城に次ぐの都會として島津義弘公以來の古城邑として重きを爲し政治上にも文學上にも將た農商工業上にも重要の干繫を有するの土地として幾多の俊才偉傑を產したるの歴史を有し得んや。

り而して戰後帝國の要務は世界一等國の伍伴に列したる自然の趨勢文にも武にも將た靈にも質にも益々向上の道を講ずるの急務なる秋に方り國家の單位たる村間の進歩鄉黨の發達を期するの主旨を以て柁城雑誌の發刊を見るに至る所謂天時地利人和共に併せ得たるの美譽として余輩の賛嘆措かざる所以なりとせば、其機關雑誌たる「柁城」の旨趣、亦敢て知り難きに非ず。今や初號發刊の報に接し多大の喜悅と同情とを以て之を迎へざるを得ず。

鹿兒島新聞社

### 「柁城」の發刊を祝す

加治木同鄉會の機關雑誌「柁城」發刊の準備成り、將に其初號の發刊を見んとす、聞く同會の目的とす所、同鄉出身者間の親睦を厚ふし、併せて地方の繁榮を圖るに在りと、同會の目的、既に此の如くなりとせば、其機關雑誌たる「柁城」の旨趣、亦敢て知り難きに非ず。今や初號發刊の報に接し多大の喜悅と同情とを以て之を迎へざるを得ず。

抑も一國の隆盛は、一郷の隆盛より起るもの、一國の隆盛を計らんと欲せば、先づ一郷の隆盛を圖るを要す、而して一郷の隆盛は同郷の人士、平生相互の意志を疏通し、智識を交換し、親睦を厚ふし、協同一致して地方の繁榮を企圖するより成るもの、隨て同郷會の組織あり、機關雑誌の發刊あるは、孰れの地方に取りても、最も有益の手段と謂はざるを得ず、而して縣下屈指の都會たる柁城に於て、從來是等の企圖なかりしは、吾人の遺憾とする所なりしに、今や有力なる島津男爵の首唱に依り、同郷會の組織せらるゝあり、同時に機關雑誌として「柁城」の發刊を見んとするは眞に機宜を得たる企圖なりと謂ふべし。

柁城人士にして今後是等の設備を利用し、時勢の進運に應じて劃策に怠りなくんは、柁城の繁榮期して待つを得べく、以て國家の隆盛に貢献するを得ん、今や「柁城」發刊の報に接し、欣躍を禁する能は

す、聊か一言を吐露して發刊を祝し、併せて前途健全の發達を遂げんことを祈る

## 鹿兒島實業新聞社長 宮里正靜

### 祝辭

今や戰捷の日本は社會のあらゆる事物に對し、急速に進歩發展を促すべくもの枚舉に遑わらず、茲に於てか當桜城に在りては有志同心協力の餘、同鄉會なるもの組織成を聞く、之れ他なし畢竟時世の要求に頗つ所、重且切なるものなくんばあらず。然るに舊領主島津男爵は夙に鄉運の開發に意を致され、是等の機關として雑誌の發行を企畫し、今其開卷第一號の發刊を見るに至りき、是所謂錦上花を添へたるもの蓋し同鄉前途の昌運啓發上、直接間接に貢獻する所のもの與て多からざるを得ざるべきは信して疑はざる所なり、且夫れ全志先輩諸士の平生万事に精密なる注意と周到なる幹旋とは、恐らく此種の淵源たらすんばあらず、而して克く多方面に展開して有形無形上、未然の福祉を胚胎増進せしむるの方途を講せらるゝが如きは、頗る機宜に適したものと云ふべし。余や桜城下に寄寓茲に三年、偶々如上の美舉を耳にせしや衷心轉た欣賛に堪へざるものあり。即ち今雜誌桜城の前途を祝するに方り、長へに鄉運の隆盛と共に渠れが將來の運命も、亦最も健全なる發達を遂げ、前途無限の行路を勇躍活歩して能く其本領を發揮せんことを祈るものなり。聊か蕪辭を述べて祝意を表す

### 加治木稅務署長 竹下

敬

(左の祝詞を寄せられたる川上氏は桜城の出身にして日下富山縣知事なり)

祝

辭

川上

親

我が加治木郷有志の諸士相謀り、内外に於ける郷人の親睦を厚ふし、先達後進の聯絡を密にし、以て地方の隆盛を期すべく、一の機關雑誌を發刊せらるゝ我郷囊には地方の公益を増進せんが爲め、錦江義會の設けらるゝあり、今や亦此事わるを見る、蓋し彼此相俟つて圓満なる効果を收むるを得へし、是れ豈一地方の慶事のみならんや、予は此の美舉を賛すると共に、當局諸士の功勞を謝せざるを得ず、古人曰く創業は易く守成は難しと、冀くは堅忍持久、以て有終の美を成されんことを、茲に一言を寄せて祝意を表し、併せて健全なる發達を祈る云爾、

(左の祝詞を寄せられたる新納氏は桜城の出身海軍大佐にして日下休職郷里にあり錦江義會の會長なり)

### 祝桜城號之發刊

代表 錦江義會 新納時亮

方今一郷一邑部落を作せば必新聞雑誌の機關莫る可らず本邑亦夙に欽暴して煩まさる所なりしか今や本邑に因縁淺からざる島津男爵主幹と爲り桜城號發刊の企圖ありと聞く實に我人大旱の雲霓に臨むが如く殊に錦江義會に於ては同誌の示導に俟つもの甚た多るべし男爵の舊誼を重せられし芳情と委員諸士の熱精なる補翼に對し感謝の至に堪へざるなり夫れ創業は易く守成は難しあとは魏徵か世の無稽なる輕舉者流に一鞭したる警語とかや往々起業家の永遠の維持に深く研究せず半途にして廢業の失体を演するは古今の通弊たり此發刊の如きは尤思慮深き委員諸士の日夜黽勉經營に屬する者なれば將來本邑の發展期して待つ可なり予は茲に義會に代り聊か蕪辭を述べ祝賀の意を表し併て委員諸士の健康を祈る

(左の祝詞を寄せられたる神木氏は桜城の出身にして鹿兒島縣選出衆議院議員なり)

## 祝

## 辭

# 柚木慶二

(十)

天下は天下の天下にして一人の天下にあらずとは的に入類社會を根底より活動せしむるの警句ならずや、即ち力ある者は勝ち、弱き者は敗るゝの理を、最も能く言ひ顯はしたる文字にあらずして何う、戦後の帝國は特に一段の鼓舞を要し、國家の各成素、大に小に、穩健着實の發展を必するの時に際し、我が敬愛する島津久賢男、有志の輩と提携して、雑誌「桜城」を發刊し、同郷の友誼を温め、智識を交換し、志氣を磨勵し、一村の進運幸福を計らんとす、余の一言以て祝福の誠意を表せざる能はざる所以なり。

(左の祝詞を寄せられたる佐木氏は桜城の出身海軍機関大佐にして自下海軍省人事局に奉職中なり)

## 祝「桜城」發刊

# 木佐木幸輔

曩日男爵島津久賢閣下より郷里加治木に於て一村の發達を圖り公共の福利を増進するの目的を以て、桜城なる雑誌發刊の御計畫があることを承はり且つ舊領主男爵閣下が率先此の如き公共的事業に盡瘁せらるゝを聞き私は誠に無上の愉快を感じたのであります、抑も私は十四歳のときに上京致しまして間もなく海軍に入りまして二十有餘年専心軍事に身を委て居ります次第で今日まで一も郷里の事に關しては力を盡したことが無いのであります、然れども愛郷の念に至つては決して人後に落ちない考であります。

人として誰か國自慢で無いものかありましようか、ろうして私も慥に人並以上の國自慢であります、我國も前後二回の大戰争によりまして世界強國の班に入つたのであります、翻て實際の有様を見ますると御互に奮勵一番せなければなりません時機と考へます、物質的進歩と言ひ、道義的觀念の發達と云ひ、國の富力と言ひ、現狀を以て自慢に價すべき程度に達して居るのでありますましようか、斯くの如く詮して參りますると吾人の責任の重且つ大なるを自覺するのであります

我國民に大國民的氣風の備はつて居りましようか、何處となく小人島根性はありませんか、國の富力は如何、國民の體力は如何、衣食住は如何、公共衛生上の設備は如何、交通機關は如何、一として歐米諸國に對し誇るに足るへきものを發見し得ないではありますんか、果して然らば我國が世界強國の班に伍するに至つたのは單に戦捷の結果に外ならず語を換ふれば、我國民が忠君愛國の精神に於ては世界に冠たるの事實を表彰して居るのであります、此の一事が國民として自慢に價することを信トます。

桜

城

(一十)

城

時に我鹿兒島縣は古來武士道の發達を以て天下に鳴り近くは大山元帥の如き東郷大將の如き世界の名將をして居ることでありますから鹿兒島なる地名は歐米人士の注意を惹き其家庭人情風俗制度等を研究するものが澤山にあることを聞て居ます。長短互に相補ひ初めて完全なるものが得らるゝのでありますから吾も亦た熱心に彼の長所を研究し我か短所を補ふことは今日に於ける最大急務と考へます、殊に國民的性格の修養の如きは決して一朝一夕に出來るものではありませんから常に經世家の注意を乞はねばならぬ問題と思ひます、又富力は國家に對し無限の要素であります古人も衣食足りて禮節を知ると申して居りまするし、一個人にしても其通りであります、國家にしても如何に武士道が發達して居ても同時に文明の利器が缺けて居ては戦に勝つことが出來ませんから如何にせば國の富力を増進することが出来るかは前項と共に重要な問題と考へます、而して國家の改善發達は先づ其單位たる町村よりして及ぼすは自然の順序でありますから我加治木村をして全國の摸範村たらしむることに盡瘁せられることは私の切に希望するところであります、聊か所感を述べ祝詞に代ふ。

(左の祝辞を寄せられたる上村氏は桜城出身にして目下加治木村長なり)

## 桜城の發刊を祝す

青年の志氣を鼓舞し、又一般人民の輿論を作り以て村の幸福を増進せしめんと欲せば時々相會合して其の道に付論議講究するを以て最良の方便とす然りと雖こは、一方面のみに偏したるの所爲にして善く全般に涉るを得ざるの嫌あり、されど新聞雑誌の如き通信機關の備はるありて、廣く之を世に紹介するに於くは、其世道人心を裨益する蓋鮮少ならざるを知る、今や島津男爵の發企に係る雑誌桜城の發刊は、是大に吾人の心を得たるもの、抑本村の一大缺點は、從來人心の一致和合せざるにあり、この故に農に工に將凡百の事業に不振の影響を受けたるは争はれざるの事實なりとす、この弊を一掃せんとせば相互の意志に融通を圖り、能く彼を知り是を知り、以て相互の親密を計るを尤必要なりとす、桜城の任務ろれこそにあらんか、今や桜城生る、來本村の幸福得て知るべとなり、豈祝せざるを得んや聊蕪辭を陳して祝辞とす。

加治木村長 上村與八

(左の祝辞を寄せられたる上野氏ハ桜城出身にして目下情城女子高等小學校長なり)

## 桜城の發刊を祝す

上野 喜之助

世の中は進化の理に循つて、日に月に進歩發展しつゝ活動することは疑ふべからざる事實である、故に其間には盛衰興廢と云ふ事柄が生じ、又生存競争と云ふことも起るのであらう。此活世界にありて常に優勝の位置を占め、秩序ある進歩發展を遂げようとするものは、大なる覺悟を要することと思ふ。

我が村も歴史的に觀察せば追々進歩して來たに相違あるまいが、抑も事物の見様は、只經に見るばかり

りでは本當ではあるまい、之を緯にも見て自他の比較をしてこう、確實なる見當も付くだらう我が村は今日他に比して如何なる位置にあるか、又秩序ある進歩發展をなしつゝあるか、と云ふ問題に對しこそは、遺憾ながら之れを否定せざるを得ざる現狀かと觀察するのである。

此時に當り、島津男爵の發起に係る同鄉會なるものが生れ出でて、雑誌桜城を發刊し、以て村内各方面の進歩發展を圖らうとするは、誠に適切なる事と思はれる。

故に我々は村の爲進では國家の爲に、眞實この會の生れしのを歓迎すると同時に、大に雑誌の發刊を

祝する。

惟ふにこの大任を帯びたる同郷會は、誠に適當なる時季に生れしにより、將來の隆昌は期して待つべきであらう。

けれども己れ自らも又盛衰興廢と云ふ軌道を循行するものたることを自覺して、愈奮勵し完全なる發育を遂げる様に努力あらんことを、我輩は今より切に希望するのである。

(左の祝辞を寄せられたる枝元氏は桜城の出身にして目下東京毎日電報社の記者なり)

## 發刊を祝して

枝 元 長 夫

他に慰藉を得るの途少なく、且つ交際も狹まし學生時代には、自然同郷友人間の往來も頻繁であるが、世の中に出てうれしく業務を有し、又家庭でも出来るやうになると、一方に交際の範囲が擴張さるゝと同時に、今まで親密であつた郷友間の交際は急に疎遠になつて、余程努めなければ、何年経つても御互に顔すら合はすことはないやうになつて了ふ。

東京市内に於てさへも斯の通りだから、況して地方に在る友人の事などは、唯だ折りに觸れて思ひ出すだけで、從來のやうに精しい手紙などを送るといふことは極めて稀れになつて来る。

これは止むを得ないことで、閑静な地方ならいざ知らず、生存競争の烈しい都會に在ては、終日の奔命に疲れた身を、静かに家庭の樂園に横たへて、思ふ存分寛ろぐのが何よりも樂みなので、他に出で、慰藉を求むる必要がないからである。

偶々外出するにしても、音樂會とか演藝會とか、趣味の少しでも多い方に自然足が向きたがつて、済まぬことながら、同郷の友人でも訪づれやうと思立つには、余つ程無聊に苦しまなければ出來ない、甚だ我儘な爲我的な次第で、禮義も何も顧みないやうだが、包まず言つて了へば實際斯の通りである。

而かも一面から云へば、これ寧ろ喜々べき現象で、同郷者間の疎遠は即ち其人が社會に活動しつゝあることを証據立つるものと云てもいい、何もしないで遊んでのらくら日を送つて居ると、ツイ他人の事が氣になつて、ヒヨコく同郷會を訪ね歩き、甲家の惡口や乙家の欠点を探り出して吹聴し廻はり、いらざる世話を焼いて獨り徒に煩悶したくなるので。

併し爭はれぬものは同郷の友である、如何に平素は疎遠に打過ぎ居ても、なにも惡意あつてのことではないから、偶々其人の噂を聞いたり、稀に顔を合はせると、それが知らず／＼追憶の種子となつて幼時の面影までも思ひ浮べられるので、友愛の光はいつの間にか輝いて相互の心底を照らすのである、如何に故郷に虐待せられても、望郷の念は人間自然の情であるから、郷里の摸様を聞いては何とも親愛の念を生するものである。

雑誌「桜城」も一は是等の要求に應せん爲めに生れたものと信する。我々如き常に繁忙の境遇に在り、郷友の消息を知るの機會少なきものには、一層の懐かしさを感じるので、特に如上の意味に於て之を歓迎するのである。

## 祝　　辭

(左の祝辭を寄せられたる木田氏は桜城出身にして目下鹿児島新聞社加治木支局員なり)

古來人心の和合し難き本村をして豁然大悟平和に圓滿ならしむるの道を講ずるは今日の急務なり、鐵道開通以來商工業經濟界に被むれる打撃に對し、之れが復舊救濟の策を講するも亦今日最大の急務たり、或は學校基本の財源を策立し或は農工商何れか本村の村是として將來に發達せしむべきか等其急なるものの數へ來れば實に枚舉に遑あらざるべし  
考一考せば本村現下の狀況將來の趨勢實に憂慮に堪へざるもの多きは彼我の大に確認する処なりとす壹萬有余の村民同胞中之れを知り之を論談するの士には乏しからざるべしと雖然も之が實行者となり之れが率先者となり之が任に當るの士に於ては寥々晨星も啻ならざるを恨事とせり  
蓋し宇宙間の事一として精神の到る處何事か功の期し能はざることやわらん然り而して事實は往々之に反する所以のものは精力足らざる爲りみ共人と得ざるが爲めのみ其方法を過てるが爲めのみ茲に人情に富み仁心に厚き我郷の舊領主島津久賀男爵下は如上我郷の急所を看破せられ緣故ある本村の衰運を對岸視するに忍びず憤然率先自ら資を投ト筆を執り以て同郷會なるものを組織し其機關として雑誌を發刊するの必要適切なるを警示されたり恰も好し大旱に雲霓を望むが如く郷民誰れか浦手として之れに同情を表し其芳志に對し感涙を以て迎えざるものやわらん恰も響の聲に應するが如く本會と雑誌との成立を見るに至れり之れ豈に人と方法と併せ得たるのゆゑにあらずして何ぞや眞理の發揚と成功の確實とは正に期して待つべきのみ  
己に會は生れ桜城てふ雑誌は發刊されぬ本村諸般の事將さに今より光明を放たんとす我々村民たるもの豈夫れ默止するを得んや欽慶の一念實に禁する能はず敢て卑言を顧みず茲に謹んで祝意を表し併せて永遠に健全なる發達を祈る

## 發刊の祝辭

郁文館長 資 鳴佐吉

島津男爵の主唱に係る發刊の雑誌、柁城の第一號は生れ出でたり、乃知る本村民の各地に散在する者は、之に依つて廣く内外の事情を知り、又以て相互の氣脈を通して相親しみ得べく、其進んで郷里の爲に計畫し、普く村民に向つて警告せんと欲する者、其意見を本紙に掲載するに至ては、將來本村の進歩發達は期して俟ち得らるべきを、豈祝せざるを得べくや、茲に聊蕪辭を陳して本誌の發刊を祝し、併せて將來に於ける本誌の健全を祈ると云爾

(六十)

柁

(左の祝詞を寄せられたる岩城氏は柁城出身にして目下青少年を教育する青雲舎の舍長なり)

祝辭 有爲舍長 濱田彦藏

櫻花既に其梢を辭して黃土に委し希望に満ちたる新綠の候となれるの時島津久賢男の主催に係る雑誌「柁城」は多幸なる新運命を荷ひて其初號を發刊せらる

惟ふに柁城の地は薩隅日の樞要の地を占め錦江灣頭に位し物品集散の衝に當ると雖も由來人心統一を欠き共同心に乏しく爲めに一致を破り進歩の域に達する能はず而して年々歲々衰微に趣き世の進歩に伴はず商工振はず心あるものは常に之を憂ひ挽回の策を講ずと雖も未だ其効を見る能はざるもの畢竟統一機關の不備によらずんばあらず

然るに舊加治木城主島津久賢男は舊領地の將來を慮り日夜之を憂とし先きには公園の開設を思ひ立ち今又雑誌發刊を計畫して之が繁榮を計り民心を統一し商工を振作せられんとすれば我が柁城の將來に於ける發展と進歩とは期して待つべく雑誌「柁城」の運命や重且つ大なりといふべし嗚呼我柁城の將來を思ひ吾人歡喜と感謝に堪へず蕪辭を陳して祝詞是なす

城

城

(左の祝詞を寄せられたる岩城氏は柁城出身にして目下青少年を教育する青雲舎の舍長なり)

祝辭 青雲舎長 岩城豊次

曠古の戰役後國運愈々隆盛に、諸般の事物益々發展せんとするの秋に方り雑誌柁城、島津男爵の熱誠なる首唱の下、多數村民の深厚なる贊同の裡に生れたり、誠に時勢に適應せる美舉と云ふべし豈賀せざるべけんや、其我村の將來に一大光明を寄與し諸般の發展に對し、貢獻するもの多大なるや知るベき也、惟ふに我村は多年村内の圓滿を缺き爲に内外の施設、動もすれば機宜を失し、心ある者をして常に慨嘆に禁へざらしめたり、然るに時勢は村民の覺醒を促し來り今や和衷協同の實を見るに至れり、此際柁城生るゝに會ふ有志者克く此好順潮を利導し此進運に鞭撻して捲ますんは夫れ克く我が面目を刷新し日進の世運に伴ふとを得ん乎、只這般の事業なるや其計營容易の業に非す熱誠を以て相協力する所あるにあらずんば龍頭蛇尾の譏を來さん。愛郷の諸君よ、願くば諸君と共に終始同心協力其發達を計り以て郷人の希望に副ひ併て男爵の好意に酬ふる所あらん、茲に發刊に際し聊か所思を披陳して祝辭に代ふ、

## 祝柁城雑誌發行

城

柁

(七十)

加治木小林區署長 池邊 定

島津久賢男爵閣下舊領地たりし柁城下の發展に資せんには先づ從來の總ての階級を徵奉し諸々の情弊を打破し相融和し相抱容せしむる、要あるを認め同志を糾合し其機關として雑誌發行の舉あるを聽く吾曹暫く茲の地に寓し感へ同しくする者祝せざらんと欲するも得べけんや只た斯舉の古人の所謂始わら能く終あると少しとの深言に叛くあらんことを庶幾々而已聊か蕪辭を陳し祝詞に代ふると云爾

## 論 説

(左の論文を寄稿せられたる濱田氏は枕城の出身にして目下東京時事新報記者經濟部主筆なり)

## 自治制と基本財産

濱田精藏

利用厚生と云ふ語は古來普ね、用ひらるゝ言葉なり、其出所を尋ねるに尙書の大禹謨の篇に、一に正徳二に利用三に厚生とあり、後世の和漢人これより利用厚生を口にするに至りたるものなりと云ふ、彼の功理論者の所謂、最大多數の最大幸福、若しくは社會主義者の所謂、平均一などを云へる、其語同トからずと雖も、其本旨とする所は共に、此利用厚生の道を遂げんとするの意に外ならずと云ふべし。

抑も自治團体たる市町村は、國家の機關なると同時に、國家の組織の一部を成すものなると勿論なりとして、扱て自治制の目的とする所は如何と云ふに、立論の根據を政治學上に置くか、經濟學上に置くか、將た社會學上に置くかに從つて、種々の議論あらんかなれども、然れども歸着する所自治制の目的は、利用厚生の道を遂げんとするに在ること、吾輩の信にて疑はず所なり。

英國の政治家プラハム卿は、熱心なる普通教育獎勵家なりしが、卿は曾て一般の英國人が、皆ベーコン(大學者)の書を読み得る迄に、教育の普及を計らざるべからずと語りたるに、經濟學者にして又政治家たりし、彼のリチャードコブデンはプラハム卿に向ひ、卿はベーコンを読み得る迄に、國民教育を進むべしと主張すれども、余は一般の英國民が、常にベーコン(豚肉の燻製)を食し得る迄に、生活の程度を高むるの法を講せんことを望むと答へたる奇談あり、之れ一場の奇談に過ぎざれども、此二大家が相倚り相扶けて、身心両様の厚生に貢獻したる、其消息は以て窺知するに難からず。

自治團体としての市町村の事業は、教育の刷新普及、生産の獎勵、慈善救濟の施設等、殆んど枚挙に

違あらざれども、要するにプラハム卿と、リチャードコブデンの二大家が、各々主張したる所の身心

両様の厚生を、両ながら之を現實せんとするに外ならず、而して市町村にして充分に此目的を達せんとならば、先第一に資力の充實を期せざる可からざるは、蓋し何人も異論を挿む能はざる所ならん。通例市町村の財産は、基本財産と消費財産の二に別たる、基本財産は市町村有の不動産、積立金及び臨時の収入等にして、消費財産は主として市町村稅を指すものならんが、若しも基本財産の蓄積遺憾なく、基本財産より生ずる収入を以て優に、自治事務に所要の經費を辨て得べし、元來市町村制の精神に於ては、市町村の歳出は、先づ基本財産より生ずる収入を以て之に充つるを原則とするを以て、市町村稅を徵收して漸やく、經費を支辨し行くが如きは、全く此原則に據ること能はざる、場合に限らるゝものと云はざるべからず、然るに内務省當局者の調査したる所に依れば、全國中の市町村の内、市町村稅を課すことなくして、能く其經費全部を支辨しつゝあるは、僅かに數町村に止まり、經費の半額を支辨し得るものも、尙ほ漸やく數十箇町村を數ふるのみなりと云ふ。

同トく當局者の調査したる、所謂摸範的自治村の實例を見るに、福島縣下の某村にては、明治二十四年村の名望家某、率先して基本財産を造るの必要を説き、普ねく之を全村に謀りて寄附を募りしに、其金額千餘圓に及びたり、當時又別に毎年村稅より幾分を割きて、積立を爲すことにしたる爲め、數年後には基本財産富裕となり、其財産の収入は優に經費を支辨し得るに至れりと、千葉縣下の某村にては先年、學校の基本財産として、千圓の寄附を申出づるものありし時、時の村長は此機に乗じて廣く寄附を勧誘し、其額一萬余圓に上り、其収入を以て教育費の全部を支ふるに至り、三十七八年戰役の爲め、一般的の經費に緊縮を加へたるに拘はらず、教育費に毫も削減を加ふるに必要なかりしと云ふ、去りながら有志者の醵金に依り、基本財産を造る事は、普ねく之を望み得べきに非ざれば山ある町村は其山を利用し、海あり河ある町村は其河海を利用して、基本財産を造るの法を講ずるは最も必要な、宮城縣下の某村は、夙に基本財産の必要を悟り、官有林野の拂下を請ひて之を開墾し、其反別今

や數十町歩に上り、其收入は教育費の大半を支辨するに至れりと云ふ如き、以て他の範となすに足るべし。

基本財産を造るの法は、固より一定せずして種々雜多なれども、地形の如何に依り各々適する所に從つて、有利事業を起すの外、不用品の賣却代金、國及府縣の交付金、手數料使用料並びに剰余金の類は、成るべく基本財産充實の資に充つる様、平常の心懸肝要なりと知る可し、去ればとて彼の徒らに消極的に流れ易き、所謂勤儉貯蓄論の如きは、聞くものをして動もすれば、退嬰萎縮の弊に陥らしむるの嫌ひあり、須らく積極の方針を探り、姑息の手段は断じて排せざるべからず。

之を要するに自治町村に於て、基本財産の充實を計り、其財産より生ずる收入を以て、経費の支辨を爲し得るに至らば、課稅を免除するを得るか、若し然らずとするも大に之を輕減し得て、或ものは生計費の幾分を割かるゝ其苦痛を免かれ、或ものは生産資金を削減せらるゝ其損失を免かるべし、之れ實に自治制の本旨を全うする所以にして、又眞に利用厚生の道なりと知らざるべからず、基本財産の必要なる所以と、其造成の法に至りては、尙ほ詳細に研究する余地あるべきも、今は只其梗概を論じたるのみ。

### 「桜城」に對する希望

枝

風

△僕は「桜城」に就て必ずしも名論卓説を承らうとは思つて居ない、名論卓説は今や多數の書籍や雑誌に満載で、鼻についてたまらぬ位の、特に實行の伴はぬ口先ばかりの名論は誰れでも出来るものだから「桜城」もろん空想的な空威張な見榮は一切排して、肩の凝らぬ極めて無邪氣な懐かしい内容にしてもらいたい。

△競争や陥穽や嫉怒や邪推や凡て是等世間的の惡分子を排して、和氣藪々たる間に郷里の氣風、風俗、それが世と共に推し移る様や、婦人界の好尚、流行、結婚、家庭、などいふ方面の事と多く知りた

いと思ふ。其他個人の消息、特に内外各地に散在せる人々の職業、地位、生活の状態等まで知ることが出来たら更に興味あることであらう。

△人によつては之を競争的とも見て、桜城と云ふ一小範囲に齋齧として、毀譽褒貶の境に彷徨するもあらう、それはそれで可しとして敢て咎めない、が唯だ成るべくは虛心平氣に、友愛の情を以て家族的に睦みたいのが恐らく本誌發兌の目的でもあらうと思ふ、果して然ならば本誌は議論の筆戦場ではなくして人生の安息所、廣き意味のホーム！一度び本誌に接すれば、名譽や利得の念を去つて、各自がそれ／＼追憶の跡を辿つて幼時の姿までも幻影のやうに浮ばせるといふ、極めて罪のない長閑やかかるものにした方が宜いのである而してこれ一面故郷を重んじ、祖先を敬まひ、併せて先輩を尊ぶの道にも叶ふものではあるまいか。

△要するに如何なる人でも假令情落の淵に沈んで世に顧みられざる人、獄窓に沈吟して世の同情を失したる人でも、之を繙かば何となく一の慰藉を得て、自暴自棄より脱れしむる位の懐かしいものにしたいものである、即ち得意の多忙なる人には反省の動機を與へ、失意不遇の人には慰藉の料とならしめたいのである。

訪

問

鶴尾所長談

### 加治木の將來

・ 記者

談話を始めた。語る處聲最も大にして、記者の筆小

ならんこゝを求められ、時に或は全々筆跡を禁せられた處もある。筆責の如き又固より記者に之れ

〔標題の如き問題を提げて、過ぐる日當鐵道廳鹿兒島出張所長鶴尾謹親氏を全所に訪ひ「鐵道より見る加治木」を中心として「加治木の將來」に就き

此の間男爵と濱車中に落合つて、左様何かソンナ様な御話しでした。「加治木の將來」隨分難かしい問題ですね、難かしいが然し、仮へば加治木の繁榮策だ、其んなものは頗から確然極まつてゐる話し

で、誰が見ても一目瞭然多言を要せぬ問題なり。唯能く之を期成するは、其の方法を講ずるだ。否どにある譯で、難易の問題なれば、今日加治木の繁榮を期圖する人士云々云々問題では無いのである。と云つて見ると、何でも彼でも繁榮の方法を講ずるといふ外餘地は無いこととなる。此の點に就きては、大に加治木人士の猛省を要することがあらふと思ふ。

ところで、世間には鐵道の開通が、加治木の繁榮に打撃を加へたかの様思つて居る人もある様だが、开んなことは断つて無い。私は思ふ。勿論、從来加治木に集散した一部の貨物が、汽車の開通に依りて多少其の通路を變じたるが爲め、之れ等の周囲に群がつて居た労働者は幾分打撃を受けたかも知れぬが、ソハ唯一部の労働者のみであつて、之れが爲めに加治木の繁榮を殺がれるなどとは毫も思はれぬのである。左様です、世間で云つて居る様に宿泊人員なれば成程減じて居るかも知れぬ、然し加治木に出入する旅客い年々増加するなどば加治木驛の統計に依つて見ても分かる、之れ等旅客の増加は、取りも直さず加治木の取引が増加した

て居ることは争はれぬ事實である。大体交通機關の備はるにつれて、其の土地の地方の生産増加を示すものたるに相違ないのである。大體交通機關の備はるにつれて、其の土地が賑ふて來るのは、之れは土地繁榮の原則であつて、加治木とても多少其れ以前に比して繁榮に赴いて居ることは争はれぬ事實である。思ふに加治木は工業の地で、將來製造地として發達することは私の信託で疑はぬ處である。殊に遠くからして全線開通の曉には、原料の輸入なり製造品の搬出なり所謂四通八達の便があるから、加治木の有志家資本家は今より之れ等の用意を爲し、且つ各地の資本家を誘致して土地の富源を開拓する方法とも講す可きであろうと思ふ。

東ノ角繁榮を希求すると同時に其の方法を講ずるには繁榮期成の第一條件で、産業上常に各種の方面に向つて發展を試み、且つ毎に其の花客を誘致するのを忘れてはならぬ。加治木工業の將來に向つては、多少私も光明を認める處があるので、幸ひに此の夢が適中するならば、加治木の將來は頗る多望のものとなるであらふと思ふ、然しそれ以外今に於て種々の工業が計畫せらるゝならば、

ソハ更に加治木の繁榮に錦上の花を添へる譯であるから、此の點に就きては返すべくも加治木人士の猛奮と反省を促したいのである。

## 史傳

岩城 豊次

加治木城主上古の儀不詳、中古大藏氏の人數代加治木郡司たり太夫良長の代に至り男子なく女子を肥喜山女房と稱せり寛弘三年（第六十七代一條天皇の御代）（今を距る九百貳年）關白藤原賴忠息宰相經平當鄉に配流せられしが良長女子を以て經平に配し家を續がしめたり（一説に良長其妻肥喜山後家郡司職兼帶の處經平と相婚するに至れり）と經平實に加治木氏の元祖にて二代藤太夫經賴三代大隅大掾賴長四代大隅大掾賴光五代大隅大掾資光六代神宮別當資房七代大隅守資平八代加治木八郎親平九代六郎恒平十代新六實平十一代太郎三郎平十二代又六氏平十三代彦六貞平十四代左衛門尉政平十五代左衛門尉里平十六代左衛門尉氏平十七

召移されたり自大永七年至文錄四年凡百九十年也尤是迄の城主は代々に居住、

慶應四年、惟新公依朝鮮御軍功正月御分國中御藏

入給人分不殘御請にて加治木御領内に相成り全十

三年十一月當所只今の御城地へ御屋形御造營有之





海山をへたてし友のれどつれを  
ゐなからにしる文は此ふみ 同  
大舟のかちきの花とさきても  
海の外にも香を送るらん 森山まん子

### 漫 言

國民教風に就て 墓庵居士

△此の頃教育家や學生がさうだの、社會教育や宗教がさうだの、やれ文弱に流れたり、墮落したのと世評はなか／＼色々である、

△しかし辯護する譯でもないが、概して云ふたらば、年々豪い方に向つて居るだらうと、僕は思ふ、ハつまリ推理の強い者は、あまり美的な方に意を注がず、詩的な側の者は、あまり理論に重きを置かぬなどは、世上ありがちの弊だらう、△ろこで反省して已れの長短を補ひ、兩者を通じて趣味を解する様にならねばならぬのである、△先頃ローズウェルトが、ワシントンの小學校で、怪言の訓戒をして、平生は餘り溫柔でなく、却

つて粗暴であれ、諸子は成長して小人物となるな  
かれ、寧ろ卓越したる大惡漢となれ、と謂ふたう。  
△然るに我國の教風は、稍もすれば氣よりも才に  
重きを置く、風潮ではあるまいか、

△此邊についても須らく、慨世の志士や、憂國の  
仁人は、大に顧慮して貴ひたひものである、

### 雜 報

#### ○本誌發刊の経験

本年六月中旬のこと也。島津男はわざ／＼鹿児島より來加して雑誌發刊の素志に付五六の有志を集め談せらるゝ所あり。何れも大に之れを賛して同月廿三日村内有志者の參集を青雲舎に請ふて、男より雑誌發刊の趣旨（本誌卷頭に掲げたるものと大略同ド）方法等に付説明を爲し賛成を求める。會者四十餘名皆之が發企者たるを諾し、初號を配付して廣く會員を募るに決し、十名の準備委員を擇舉し、第壹號記載材料の蒐集其他の任に當

業後魔島に歸り、九月十四日朝野の貴紳を招待して結婚の披露をなし、十月七日加治木に於て同ドく盛大なる披露式を挙げられしが、本年二月令嬢澄子は幸福なる新家庭の花として生れ出給ひぬ。

#### ○扇 和 園 孤 劍 生

園は日本山なる舊島津邸の屋敷跡を拓き私費を投トて島津男の設計せらるゝ所也。今年の三月頃着手せられたる趣さを聞き得たるのみ、未だ一度も訪ぶの機を得ざりしが、六月の末宿雨新に霽れて吹く風涼しき日友宇都宮君を誘ふて遊ぶ。

停車場側を行きて小陣に入り、清流目高の遊遊するも見らるゝ日本山川を涉りて蜻蛉飛び舞ふ稻田の青畦を行けば、一本の老松山を負ふて聳ゆる所躰てろこ也。

らしむ。而して初號の編輯は男の親らせらるゝ所にして、印刷其他の費用も亦皆男の負擔せらるゝ所也。爾來男は屢々來加して熱心盡力さるゝ所あり。委員は假編輯事務所なる鹿兒島新聞社加治木支局に數回會合して編輯法、材料蒐集等の相談打合はせを爲し遂に本月茲に本號の發刊を見るに至れり準備委員は

本田克、上野喜之助、長谷場唯二、曾木悌二、法元一郎、佐藤友樹、城川市二、岡山猪治、宇都宮虎二、牧清虎の十名なりしが、岩城豊次、濱田彦藏、森山藤次の三君は委員を助けて盡力さるゝ所ありき。

桜城第壹號發行準備委員

#### ○島津男爵の家庭

鹿兒島市長田町島津久賢男の邸宅は母堂と男と夫人と令嬢と四人の新家庭なり。男は去る三十八年十二月（當時早稻田大學政治科在學中）冬期休業に歸省して許嫁直子嬢と合巻の式を擧げ、家族携帶東上して、翌卅九年學校卒

詩趣いかに興の多からむ。

石橋を渡り楓樹松樹參差して影させる間を縋ふてゆけば櫻樹多し。艶陽三月蠶蟬たる芳雲妙香を搖はして美神おもむろに天降りませば、千葩万蕾ひとしく媚を含み、笑を湛へて、微風にうよがむ時、憶がれ心、人は花下をさまよひて自然の寵兒たらむ。こゝやこれよりながく諸人が惆悵の樂園たるべけれ。

段を刻し、階を爲して、漸次に高くなりゆける丘陵には、櫻梅五葉松其他の花卉多植せられた。特志ある村長有志家達が其前栽の眺望を割いてこゝに移し植せたるものあり。されば梅の未だ苗木なるに止まるものと共に大方は男が大坂或は鹿児島より齋らされたるなりといふ。すらりと長く植え並べられたる萩は青年夜學舍生一同の寄附せる所のもの也。薄紫の花、淡紅の花、金風にうよいで、月や白露や虫聲や、秋の姿はやがてこゝに宿るなるべし。

一株の巨木亭々として、空を摩する樹下の切株に腰うち卸して憩ふ。

左方近く眉を壓して南走する黒川山、右廻に海

てらるゝなりといふ。

試みに思ふても見給へ！

幽靜の風、閑寂の趣をつくしたる園を見下す山上の清楚なる四阿！

月雪花四時の眺めに富める此山の上！

若し夫れ明月軒に臥々として、爛漫の花精夢の

如く浮動する春宵、殷々霞をわたりて響き来る鐘の音を聞きたらんには!!

落日西の山の端に春きて、陸離の彩雲北空に搖曳ければ、日本山川の清瀬韻をおくりて、一村時雨に日は黄昏れんとする秋の夕、心なき身にもあやしき思ひの胸にわきて、あゝ高き調に鳴りや出づべき。四顧徘徊、友と未來多き此の園を語りつゝやがて山を下り歸途につきぬ。

扇和園！着手日尚ほ淺ければ未だ其態を整へず

と雖五年乃至十年の後には結構雅致、幽靜閑寂人の俗腸を洗ひ、心神を和暢ならしめむ寔に扇和の名に背かざるべき也。

因に記す、有志家新納時亮氏は最初より設計に監視に熱心盡さるゝ所あり。

中に突出する吉野の連山、ろの間に劃せられたる一望の眺曠雙眸の中に集まりて、溶々たる錦江灣上櫻岳の巍乎たる、白帆の點々たる、さては清風なよら吹く田の小川にはむくくと肥ゑたる裸体の今金時が目高すくうと餘念なき河添ひを今しも黒煙を吐いて下り列車の走りゆけるなど、宛然ミレーが自然畫中の景なるを覺ゆ。

園の東隅、石を疊みて家造りの構へせるは近きに假屋馬場なる稻荷神社の移轉さるゝなりといふ。石階百餘、背に流汗して登れば丘陵の上に立つ。突帆雲に入る三千尺、嵯峨たり、崢嶸たり。  
(あゝ秋闇けし山峽の、靜寂をやぶる山彦して、園の梢に鳴く猿や、戀しき友を尋ねつゝ、岩が根蔓傳ふらむ)猿猴尚ほ攀づるに惱まび、名に響きたる藏王岳を背負ふて、園を脚下に踏まへ、徐ら眸を放てば、眼界頓に濶けて、若葉の中の町も、一面青綠なせる田圃の中に蜿蜒銀を溶せる如き川松林も、松並木も、街道も、人も、車も、海も、  
も、日圃を劃れる山々の麓に炊煙あがる村々も、  
船も一目に見渡されて、心ゆくと限りなし。

### ○製絲場櫻島館

加治木停車場の北、横川街道の右に沿ひて、燐たる白堊粉壁に、墨痕鮮く櫻島館と大書せる建物を見るであらふ。ろして内筒の煙が高く藏王岳を凌がむとするを望んで、何人も何かの工場なるべしと想像するであらふ。

これが製絲場櫻島館、前身佐藤製絲場なのである。

現状を聞いてみると

壹ヶ年間繭買入高壹千〇五拾石(明治四十年度)

繭絲高一ヶ月  
四貲〇五拾枚  
百貫〇九百三十拾五枚(行賃日數二十七日)

使役工女數一ヶ月  
壹千〇九百三十拾五枚(拾ヶ月間)

笠數

六拾個

一日の勞役時間は十二時間とす。

製絲事業が國益上重要視せられず、又該思想が一般に普及せざりし當時に於て創業した同工場は經營に畫策に、奈何程苦心慘憺の歴史を有するか想像するに餘りあるのだ。

けれども國運の膨張は、工業思想の發達と共に漸次斯業の進歩を促がし、養蚕の發展と相俟ちて

同工場の事業も日に月に隆盛の運に向ひ明治三十

八年には既に工場の狭隘を感じるに至り全三十九

年今處に工場を新築して移転したのである。

創業當時煙筒の煤煙問題などで近隣より苦情が

出るやら、困つたこと也有つたろうだ。

附、櫻島館なる屋號は商標が鹿兒島の名産櫻島大根なるの故を以てそれで因み附けたのだといふ

### ○鹿兒島授產學校加治木分教場

全分教場は明治二十九年、日清戰爭後の經營として設置されたるものにして、加治木網掛河畔にあり。一時維持困難なる等より廢止問題起り居りしを創立者池氏、前村長本田氏等之れを遺憾なりとし、石神氏等と謀りて三十九年以来同氏専ら之が經營の任に當り、新にバッタン機を用ひて編地を織るととしたり。現狀は、機百臺、工女百人より百二十人に至ることあり。織上高一日に六十反之れを金額とすれば月に四百圓乃至五百圓、一年に五千圓内外の事業なり。

給金の確實、待遇の宜き等より志望者需用以上にて、日を追ふて盛況に向ひつゝあり。

### ○小學校

本村の學事は村當事者の經營其宜しきを得たる、職員の熱心精勵とに依りて年一年に改良進歩の氣運に向ふものゝ如し。今其一班を叙述せんに松城男子尋常高等小學校は尋常科生三百十九名、高等科生四百五十二名、同校附設育英校の生徒七十五名、計七百四十六名にして其職員は十八名。

十三名、

小鳥尋常小學校は男生百九十四名、女生百五十七名、計三百五十一名、其職員は十名、

永原尋常小學校は男生六十四名、女生六十三名同校雛場分場男生十五名、女生十二名、計百五十四名、其職員は五名。

龍門尋常小學校は男生百二十二名、女生百二十七名、計二百四十七名、其職員は五名、

中野尋常小學校は男生二十九名、女生二十六名其職員は二名。

以上を合算すれば、男生百八十九名、女生七百二十七名、合計千五百四十六名、職員實に五十三名なり。而して本年度の義務被教育者の就學歩合は男生九九、八七女生九六、九二平均九八、四上り、其本年六月末に於ける出席歩合は男女平均九六、六七にして今是れを數年前に比すれば就學出席共に五步以上の増加を見るに至りし割合なりとす。

### ②中學校

縣立加治木中學校は去る明治三十年四月の創立にして既に六回の卒業生を出だし、現生徒總數四百六名にして内本村人八十八名なり。職員は校長相良三之助氏以下總て二十三名、同校は去る三十七年二月失火の災に罹りしより假校舎にて教授しつゝありしが昨年特別教室一棟、倉庫一棟落成し今や又本校舎の新築に着手中なれば遠からず完全なる教室を見るに至るべし。同時に運動場の狹隘を告ぐるより本村よりは更に東隣一町歩餘の土地を買ひ上げ之れを寄附する筈なりといふ。

### ③同盟教育會

同會は明治二十七年一月の創立に係る、會員は

本村人にして教育に從事するもの其數殆んど百七十餘名、目的は斯道の進歩發展を圖ると同時に會員互に相親和し其体感を共にせんとするにあり。會員は維持費として毎月俸給の千分の三づゝを醵金するものとす。今や此金積りて賑百五十餘圓に至る。同會がこれ運営し來りたる事業としては會員の不幸を吊ひ、窮状を救ひ或は時に名士を聘し講演會を開きて廣くこれを聽かしむるが如き、或は曩に日露戰爭の際は出征軍人の家計困難なる就學兒童に文具を給與せしが如き、又教育に對する功勞を旌表せんが爲め繪本正次郎、池直一、伊藤世傑の三氏へ相前後して物品を寄贈せるが如き、隨時必要に應じて諸種の奨勵便益を計りつゝあるは大に吾人の意を得たるもの也。川上親晴氏亦此會の趣旨を贊し先きに歸省の際金拾圓を寄贈されたりといふ。

### ④教育者の譽

義に本村訓導原田定吉、上野喜之助、鈴木正次郎、法元ちかの諸氏は教育功勞者として獎學基金支給規則に依り本縣知事より金員の賞與を受け本

年又日露戰役に對する功勞者として原田定吉氏は文部大臣より金員の賞與を受け木場仁之助氏は精勤者として本縣知事より金員の賞與を受けたり。因に記す、本村出身の屋久島栗穂尋常小學校長大内山精太氏も原田氏同様の賞與を受けたりといふ。

#### ○中馬翁の精勤と村人の美舉

塙城男子尋常高等小學校使丁中馬市兵衛氏（龜助翁）は明治十二年使丁の職に就きし以來今日に至るまで殆ど三十年一日の如く校務に勉勵し今や六十九歳の高齢に達せしも尙ほ誠心他意なく忠實に勤務するにより村内及び村内に居住する人々は皆其操志に感ドて幾分づゝの金員を釀し其勤勞に酬ひんとの企ありしが其金額既に百圓近くに達せしかば遠からず盛なる贈與式を擧ぐる筈なりといふ。

#### ○婦人會

同會は去る卅七年を以て起り、家庭家育の改善と女子の風紀を維持するが其重なる目的なるが

如し。然して其目的を達せんが爲め隔月一回會合し、教育衛生上の談話を開き又實行上の諸問題を協議する事となり居れり。彼の日露戰役の際の如きは軍國他事の世に處する婦人の務をも發揮せんとて會員の勤労より得たる金員五拾圓を海陸軍恤兵部に寄附し或は懇問袋八百餘個を製して出征者に寄贈し、或は七拾餘圓の金員を村内出征者の家計困難なる家族三十餘戸に惠與せるが如き、誠に感すべきこと多かりき。先さに川上親晴氏あれ等のこと聞き同會へ金拾圓を寄贈されたりと。會員總數は殆ど三百五十餘名にして會員よりは一ヶ月金壹錢づゝの會費を出すこととし今やろの金額積りて七拾餘圓に達したりといふ。

#### ○勅題預選者

今年一月勅題の新年松に詠進して預選を蒙り我村空前の名譽を博したる閨秀歌人ありき、是を誰れどか爲す曰く森山まん子是也女史は當町故松田淺右衛門氏の長女森山彦太郎氏の妻たゞ夙に歌道に志し造詣する所淺からずと云ふ如是は獨り當人の名譽たるのみならず實に本村本縣の光榮なりとす

是を以て彼の錦江義會の如きは物品を寄贈して之を祝したりと云ふ左に其詠進歌を掲げん

朝日さす春のみ山に年たちて

小松のたけものびまさるらん

#### ○入學と卒業

本村出身の學生にして高等學校程度以上の學校卒業生入學生は左の如し

卒業の部

東京早稻田大學高等師範部地歴科 原田 孫助

東京早稻田大學高等師範部英語科 有川 貞治

帝國大學獸醫學實科

熊本高等工業學校土木科

比志島源一郎

入學の部

長崎醫學專門學校

壹岐 鶴吉

#### ○農家の副業

選舉行はれ、悉く適當なる人物を擧ぐるに至りしは、誠に村の爲め慶賀の至に不堪、今や村役場に於ては、温厚篤實なる村長上村與八氏極めて忠實に村治に盡瘁し、助役としては岡山秀助氏、収入役としては四元莊助氏、其他の吏員各々適材を得、村長を補佐して熱誠以て自己の勉勵せるに依り、村の經濟に教育に衛生に將た實業に着々其歩を進めつゝあるは諸氏の功と云ふべし。

本村は從來調和の機運に達せず、有志者深く之を憂ひたりしが、世の進歩は何時迄も蝸牛角上の争を許さず、村民漸く此に覺る処あり、今年三月村會議員半數改選の如き、村の先輩有志諸士の斡旋盡力に依り、市町村制實施以來未曾有の圓満なる

如し。然して其目的を達せんが爲め隔月一回會合し、教育衛生上の談話を開き又實行上の諸問題を協議する事となり居れり。彼の日露戰役の際の如きは軍國他事の世に處する婦人の務をも發揮せんとて會員の勤労より得たる金員五拾圓を海陸軍恤兵部に寄附し、或は懇問袋八百餘個を製して出征者に寄贈し、或は七拾餘圓の金員を村内出征者の家計困難なる家族三十餘戸に惠與せるが如き、誠に感すべきこと多かりき。先さに川上親晴氏あれ等のこと聞き同會へ金拾圓を寄贈されたりと。會員總數は殆ど三百五十餘名にして會員よりは一ヶ月金壹錢づゝの會費を出すこととし今やろの金額積りて七拾餘圓に達したりといふ。

て、茶の栽培者には利益少く、唯自家用位に畠地の隅々に植附けしのみ、今後は製造法に熟練なる技術家を養成し、綠茶を製して海外に輸出せば、利益多く從て茶の栽培者も多きに至らんか、畜産は近頃政府より諸種の獎勵法を設け、本村にも農商務省貸附の濠州產牝馬數頭あり、其他駿良なる洋種の種馬を養ひ盛に產馬の獎勵を計りつゝあり、其他養豚養鶏は飼育極めて平易なれば廣く獎勵せんには之に優るものなからんか、山林は將來益々有望にして、殊に楠の如きは本縣の特有產にて樟腦として海外に輸出せられ、其需用極めて多く殆んぞ原料に窮する有様なり、本村も造林地としては未だ餘地なきにあらずと雖、何分伐採期限に達するまでは、多年の時日と多額の經費を要するを以て、一般に振はざる有様なり、併し縣當局者に於ては、常に苗圃を設け苗木等は全く其實費を以て拂下げ。其他種々の方法を講じ獎勵しつゝあれば、漸次盛なるに至るは期して待つべきなり、果樹は從來小兒の食用位僅か庭前に柑橘の二三本を植附けしのみにて、果樹園として殆んぞ見るべきものなく、唯當村の神村竹五郎濱田與一郎氏等

今より十數年前自宅の園内に、夏橙を多數植附けられしが、抑ひ果樹園の始めにて爾來世の進運に伴ひ、果物の需用益々増加し、隨て果實も高價り、現今植付反別五町歩余本數一萬を超へんとする勢なり、其他適當なる果樹は柑橘梨桃等にして、目今柑橘中優等と認めらるるは溫州夏橙等なりとす。

#### ●村有殖林

世運の進歩に伴ひ、上は一國一縣の財政より下は一郡一村の經濟に至る迄、年々經費の增加しつゝあるは勢の免れざる所なりとす、依て今にして相當の施設をなし、將來に處する財源の涵養を計るに非すんば或は民人は其負擔に堪へずして、終に公私業務の荒廢を見るに至らんか、我郷の先輩夙に之を憂ひ、漸く昨年の初め村内西別府嶽鼓ヶ尾にある不要存置林百余町歩を拂下げて、村營造林の企畫あり、昨春より今春に於て杉樟檜苗四萬五千本を拾三町歩余に植付、今後數年を期して全部植栽の豫定なりと云ふ、將來の好財源と謂つ可き

也、是に就き殊に感謝すべしは、村當時者之外、六拾余歳の老先輩諸氏が極めて熱心にて、路程の遠きを厭はず、常に自ら經營の任に當りつゝあることなりとす。

#### ●時報鐘

數年前當町の豪商故佐藤平右衛門氏が七百の巨金を抛ちて、斯業に堪能の聞ある町内森山正助其他の諸氏をして鑄造せしめ、以て本村に寄附したる時報鐘は、村經濟の都合により、堂臺建設は暫く見合となり居りしも、有志の諸士之を見て甚以て遺憾となし。昨卅九年の秋寄附金を募りて貳百貳拾圓余を集め、更に村費の補助額四拾余圓を得たれば、位置を村役場の左方石垣の高處に定め、直に之を建築して頗る壯觀を極む、愈々同年十月よりして午前四時より午後十二時迄毎時號報することを覺り、從て一般勤勉の風習を養成するに至れり。

#### ●支局設置

鹿兒島新聞社は業務の發展に従ひ、益々其擴張と地方の便益とを計らん爲、昨卅九年六月當地に同支局を設け、鹿兒島新聞社加治木支局と稱し、事

務所を諏訪馬場停車場の西側に置けり、同支局主幹としては、前村長本田克氏之に當り、匪勉事務に執掌して、當地は勿論西北隅一般の事情を廣く社會に紹介し、併せて當地方の產業、教育、衛生其他人文の啓發誘導に専心傾注せらる、殊に廣告印刷等に就ては本社へ直接依頼すと同様。寧ろれ以下料金にて敏速に其取次を爲し、公衆に便利を與へつゝあるは。地方人の幸福や此上なく吾人は之を多謝する同時に、將來愈々本社並に支局の盛運を祈るものなり。

#### ◎本年の農作

麥作は收穫期に降雨少かりし爲め、平年作以上の好果を收め、稻作は播種以來天氣適順を得、苗の發育良好にして植付後は雨量頗る多く幾分の影響ありしも、其濁水浸入堤坊破壊の個所等は至て少く、近來天候の順調後は例年になき繁茂にして未螟虫害の發生を認めず、現時三回除草中なり、唯今後風虫の害さへなくば非常の豊作なるべしと豫想せらる、其他大豆甘藷作等も平年作以上の出來榮なり。

#### ◎農事功勞者

我縣内當地方の老農とも稱すべき本村人岸野七郎氏は、今年既に七十二の高齢に達し居らるゝにも拘はらず、身體極めて壯健常に農事改良の爲に盡瘁せらるゝは勿論、兼て村内公共の爲に配慮せらる、彼の村有林計畫の如き氏等率先して之を唱へ、今尚委員の一入として或は勞力に依り或は樹苗を寄附して、熱心に同林の速成を計りつゝあるは村人の多とする所、以て範ど爲すに足る、我郡長亦茲に見る所あり左の褒詞を與へて氏の功績を表彰せり。

賞 狀 姶良郡加治木村 岸野七郎  
鳳に殖産の振はざるを慨し、率先身船り米租を執り、銳意農事改良に勵み、米作に麥作に熱心耕種の方法を講し、收穫の増進を計り、廣く範を示して地方農事の振作を促し、尙且加治木村波ヶ尾造林の經營に際しては、同志相計り大に力を竭したる等、其成績顯著なるを認む、仍て其功勞を表彰す。  
明治四拾年七月四日 姶良郡長從六位 岩脇 武男

#### ◎在郷軍人會

日露戰役の結果在郷軍人に著しき增加を來し、二年兵役制實施せられんとする今日、今後猶益、其

日露戰役に付本村出征者陸海軍共。總べて三百八拾名にして。金鵄勳章の殊勳を受けたるもの戦死者の外三十六名あり其氏名左の如し。

#### 海軍現存者 十四人

日露戰役に付本村出征者陸海軍共。總べて三百八拾名にして。金鵄勳章の殊勳を受けたるもの戦死者の外三十六名あり其氏名左の如し。

木佐木 幸輔  
大山 市兵衛  
袖木 彦藏  
寺師 市義義  
瀬戸山 仁之助  
白尾 稔助  
武田 新左衛門  
米良 直太郎  
兒玉 李藏  
嶽 長次郎  
中神 瞳七  
岩元 藤市  
日高 金左衛門  
入佐 直熊

#### ◎官祭招魂社へ合祀

我加治木村は村内に於ける。丁丑役(官軍)以來日露戰役に至る戰病死者五十二名を當官祭招魂社へ合祀出願中の處、今般其筋の認可を得たるに依り遠からぬ中に盛なる合祀祭を行ひ、尙毎年春秋二期に大祭を執行せん筈にて、目下之に要する基本金徵集中なり。

#### 陸軍現存者 二十二人

陸軍歩兵大尉功四級  
全步兵少尉 功六級  
全砲兵少尉 功六級  
全歩兵少尉 功七級

伊丹 桜雄  
壹岐 東一郎  
壹岐 桃治  
日高 七助



會員たるの義務を果さざる者あるときは除名する  
ることあるべし。  
第十三條、入會又は退會せんとするものは、住所  
姓名を明記し、其旨本部へ届出づべし。  
第十四條、會員は會費として、毎月金五錢を醸出  
するものとす。

第十五條、本會の總會は毎年春秋二期に之れを開  
き、役員の選舉及び諸般の協議を爲すものとす。

但し臨時開會することあるべし。

第十六條、本會は雜誌『桜城』を四季に一回づゝ之  
を發行す。

第十七條、雜誌には道德宗教及び諸學科に關する  
論說を始めとし、當村の狀況、各地に在る同鄉  
人の通信、本會員の動靜、其他統計廣告に關す  
る事項を記載す。

附、在外の會員は時々通信を怠らざること

第十八條、本會に金五圓以上一時に寄附したるもの  
のは、特別會員として修身本會の會員たる事を  
得  
附則、右規則は總會の決議を經ざれば、變更する  
ことを得ず。

明治四十年七月二日定之

加治木同鄉會創立準備委員

細則

- 一、雜誌發行度數年四回三ヶ月目の十五日とす
- 一、會費は數ヶ月分纏めて前納のこと
- 一、會費及び寄附は雜誌に姓名を掲載して、領  
收証に代ふ
- 一、投書は發行期前月末迄に寄送のこと
- 一、但紙數の都合上次會に編入することあるべし
- 一、廣告料は一行金五錢とす

◎本會の基本金寄附者氏名錄(申込順)

金五拾圓	男爵島津直子	金貳拾圓	柚木	慶二君	
<small>夫人</small>					
金貳拾圓	新納	時亮君	金貳拾圓	原田	耕夫君
金貳拾圓	犬童	英輔君	金拾圓	濱田	精藏君
金拾圓	是枝	快房君	金五圓	長谷場唯二君	
金五圓	曾木	悌二君	金五圓	本田	克君
金五圓	岡山	猪治君	金五圓	岩城	豐次君
金五圓	濱田	彥藏君	金五圓	宇都宮虎二君	
金五圓	森山	藤次君	金五圓	池	直一君
金五圓	石神	安光君	金五圓	鹿屋	武二君
金五圓	木原	巳之助君	金五圓	<small>舊姓</small> 新納	田中いく子
金五圓	松田	淺古衛門君	金五圓	大山	興兵衛君

右篤志家の外多數の寄附者ありしも編輯べし  
後に付該芳名は次號に掲載すべし

## 附 錄

# 杣城雜誌第一號附錄

前編

沖繩のぞき

黒庵居士

那霸築港問題に關し五ヶ月間餘東都にあり運動の結果有望得意で歸らるゝ処なのである。

僕は嘗て琉球に一度は行つて見たいと思つて居たが、別に急いで行く氣はないなかつた、が實は種子島行を某氏と約束した事が、此舉の動機となり、種まで行くなら一層大島迄、大島迄行くなら一層奮發して琉球迄と思ふて、新聞廣告を見たら、明日廣連丸沖繩行であるより、早速此の旅途につくことを決心した、此日は即ち去年の十月三十日の夜である。

『十月三十一日午後六時愈々船は魔港を拔錨した、其頃は時候もよく、月も丸い方なので、夜中の甲板なぞは實に得もいはれぬ妙を極めた。

『僕は小かばん一個と洋傘一本及び望遠鏡一個の外何物も携帶しないのである、ろして八圓五十錢の二等切符を買つた、其當時會社連の多少の競争

ある爲かして非常に待遇がよかつたのには惡ひ氣持はしなかつた、序でだから書くが當船の船長と

事務長とは共に沖繩の人談話などよくせられた、乗合の他一人は沖繩縣事務官日比第一部長で彼の

右の外土着の歌を時間の都合で聞く事の出來なか  
○はと吹かば三昌亭の二階ではとふかば、  
かなざるやくめてのいドつてくる、  
○取つた金を難儀苦勞して取た金を  
三昌亭のめなかに入ればてた、  
○遊べばよなきやことわすれて遊べばよ、  
遊はぬをしきやんにびんだうちくらせ、

つた事は残り惜しかつた。

『午後七時船は拔錨して名瀬港を出た、當夜も亦明月、風軟らかに浪静かである、僕は甲板にて獨酌清酒數杯を傾け、仰いで天を眺むれば感慨無量、伏して海を望めば思情百出、終には漏れで微かに聞こゆる僕の心氣(?)蒸氣機械の音響に和し、恰も靈界の樂天に遊ぶの感がした、ろして時の移るを知らず深夜脣寒きを覺へ倉皇寢についた。

『二日、今日も晴天八時床を出づれば船は早や琉球島を左に見て相も變らず進行しつゝあるのである船は例のサンバ岬を廻はつた、それから琉球の都會那覇も遙か向ふに見えた、次第に進んで其が明暎となり終に接近して、午後二時半に至り、愈々船は投錨した、市街は一寸見た處では、家屋や石垣等の構造が全然支那式の様な氣がした、それから波ノ上神社と云ふて可なり大きな神社が海岸の岩上にあり、町の後方遙か高丘には首里城が見えた、船上には奈良原縣知事代理として横内城が事官房來られ、海岸には喜色満面男自身出迎かはれた、で如何にして僕の來るを知り給ひしを聞けば、日比氏大島より僕の來那を打電せしなりと、

はつたが聞かれず、終に出席することとなつた此れも旅行中の爲め特に默許されて居るのだ、然し僕は此光榮ある宴會に列席し得たるを紀念として永久忘れないものである、僕は時期を見て宿に歸つた、所が知事の自宅にて高等官連集合して宴會開かる爲め是非來いと横内氏迎へに來られ又引張られて行つたのである、行つて見ると早や宴は酔で、中には議論に火花を散すものあり、中には喜色満面に溢れ呵々大笑するあり、踊るものあり、歌ふものあり、亂暴するものあり、之が沖縄の上流社會の狀態とは思はれぬ位で丁度僕等の亂暴書生時代に勢氣たりである、こんな騒ぎは沖縄以外の縣にても見られぬことと思ふた、それから僕は此で始めて琉球藝者の舞を見且つ歌を聞いた、舞は一々異装にて現はれ御神樂の舞みたいなものを作り、歌は例の蛇味線に和して一種の調子で面白くやるのである、然し其意味はよく解せぬが、表情の具合で少しほ解し得るのである、此から僕は又和田警務長の所に連れられて行つた、氏は日向飫肥の人謹直にして洒落大禮服のまゝ直立して御得意の都々逸を歌ふ人氏は書畫刀劍を愛翫

僕呆然たりであつた、

『僕素一介の青年然も膝栗毛の旅行二三日滯在して引き返すの考へで、ろして木賃宿位の處でのんきに御安直で済まうとの計畫であつた処が、なかなか以てうらは行かない、新聞迄も僕の來那と云ふて書き立てる、實に公然たるものとなり恐れ入つた、否困却した、ろして海岸から池畠旅館まで知事徒歩を以て自ら案内せられ種々の歓待至れり盡くせりであるから此で又恐れ入つた、來客もなか／＼多かつた。

『ろして風月(沖縄第一樓)に於て本夜實業家の發起にて日比氏の慰勞と兼ね僕の歓迎會を開くとの事だ、僕は再三再四固辭したが聞かれず又々恐れ入つて終に末席を汚すことになつた、ろしてなかなかの御馳走になつた、此屋の藝者酌婦共は皆内地のものばかり、何れも海千山千的の豪の物ばかりだらうな、其夜は十一時頃歸宿した。

『三日曇、當日は天長節の事とて官民共に縣廳にて拜賀式あり終りて南陽館(俱樂部)に於て宴會の催しあり僕も出席すべく勧めらる、然し僕は着のみ着のままの脊廣一枚なので禮服着用の仲間入を断

せられ僕にも見せられた、僕は數度の酒戦に遇ひ漸くのがれて歸り、奥武山公園を見ろれより歸途横内氏を訪問し、うして氏の案内にて辻の山杉本と云ふ純粹の琉球料理店に至り飲食す、酒は例の泡盛、肴は琉球式料理で珍物の數々を並らべ例の藝者も數人來た、言語風俗は勿論種々な習慣や生活状態等皆異なり我國內にあるの思なからしめた、此れは確かに一奇觀であつた。

『四日より十一日までは雨天がちにて戸は締切、辛ふドて外出し又は來客に接した、首里には雨を犯して單身一度及横内氏の案内にて一度都合二度行つて見た、首里城に到れば實に昔しが忍ばれた、城内には師範學校高等女學校及び工手學校があり城外の所には中學校があつた、尙家の墓など外から窓つて見たが立派らしかつた、那覇より首里までは距離一里位ある、

『十二日十三日は暴風の御馳走、此れもなか／＼の紀念だ、それと云ふも風に有名な土地だからだ十四日は餘程靜かになつたもの、微雨尙休まず徒然に苦しんだ、二三日滞在のつもりながら、半ヶ月もあり、多くの時日は宿屋籠城で、せめ

て讀書に耽りし位が關の山だつた。そして此の長い間鹿兒島行の船は一隻も出ないから、全然島流しの体裁、不平も起して見たが仕方がない、序だから讀者に注意を拂ふが、彼の琉球國は内地の二百十日とか二百二十日とか云ふ大風の標準期と全別である。毎年暴風のあるは十一月初旬より中旬に掛けて吹き然も内地のよりは日數が長くかかるるうふだ、この様な事を寸分知らず、十月三十一日鹿兒島を發し彼の地に行つたのだからならない、此は天候の悪いが罪トやない、僕が不注意な旅行の日程を取つたからだ、更笑つて見ても何んにもならない譯さ。

『然し此度の旅行で琉地の重な官民にも遇ひ、なほ琉球と云ふ觀念に於ても大体は察し得た、僕は沖繩雜感として更に後篇を設け少し書いて讀者に紹介して見たいと思ふ。さて

『十一月十五日になり御嶽丸が出帆するとの事で、雀躍して乗り込む事にきめた、宿には知事來られ別れを告げ、海岸迄は、日比重明、岸本篤昌、和田勇の三事務官喜入國頭郡長を始め數名來られ、船中までは横内扶氏來られ、種々厚意に預づかつ

た、船は午後五時半抜錨黒煙を吐き那霸港を後に見て進行した、數日の假寐の土地でも何んとなく別れると云ふことには心淋しく感トだ、海上は何しろ暴風の後幾日も立ぬことにて、大浪狂波は烈しく襲來し隨分ゆられにゆられ辛ふて大島名瀬に着いた、処が風雨の爲め一晝夜此に停船する旨傳へられた、然し僕は臺中無一物の方なので、仕方なくも上陸することを得ず、船中に無聊苦しこと、此の様なのが何時もながら大阪商船會社のやり方で廣運會社の廣運丸と比較になつたものでない、尤も其時御嶽丸も台瀬を發して三十日で居つた、そして歸りには然も一等に乗つたものなると云ふて居つたから少しば恕する点もあるが然し待遇の優劣は争はれぬと思ふ。

『十七日午後五時抜錨名瀬港を後に出帆したが、例の七島灘などは素敵にゆられ、あまり船に弱らぬ僕も一寸心意氣の歌も出なかつた、幾度か引返へさんとしたのであるが、僕等も最も硬派の方でヤレレと主張する方であつたが終に佐多の岬まで來て漸く平靜となつたが時間は餘程かゝつた、之

が平時の場合なれば鹿兒島大島間二十時間、大島那霸間二十時間を要するろうだ。

十八日午後四時と云ふに船は漸く鹿兒島に投錨した、行きは總てが順境と云ふ具合、歸りは何處までも逆境と云ふ形勢、此對照がなかなか面白いではないか、我家に歸りし時は五時過ぎであつた、

## 後編

### 沖繩雜感

### 墨庵居士

僕は秩序的に然も精審に觀察したと云ふではなく極めて皮想的に然も大体に觀察したのだから誤まりなどあるかも知れぬ然し全体に於ては先づ當らざるも遠からず考ふる處より一口物語式で少しがり讀者に紹介して見よふと思ふ。

『那霸も今は官民合同でななく勧いては居るがまだ内地よりは十年位も遅かに後れて居るが此も那霸だけで首里などは二十年後れて居ると云ふてよからふ、なほ田舎に行けば行く程右の比較は互に親しみ事業も共にやつて居るが、やはり在來の沖繩人と内地人との間には精神的に隔離がある様に思はる、其れも其の筈樞要なる地位には多方面に於て内地人之を占有し而も内地人は那霸丈

でも五百からの戸數を有してれる、そして内地人と琉球人とは共に一つの機關新聞を持つて居る即ち琉球新報と沖繩新聞である、前者の方が琉球人ので後者の方が内地人のであるとして琉球新報は以前からあるので、沖繩新聞は近年生れたものだらうだ、前者の方は日刊だが、後者の方は隔日発刊と記載して居る、内地人の中でも薩人が最も大多數れる、そして琉球人の目から見れば此薩人が大の嫌らひだらうだ、それで嘗ても其機關紙に琉球の不發達の理由として昔薩藩の暴政やら、壓制やらが原因になつてれるなどを書き立て、内地人を駭がした事もあつたうくな、然し此頃は餘程教育も普及される所から青壯年のものには追々理解力のあるもの現はれ來り追々沖洲の文明も向上するだらうと思ふ、まだ老年の人は内地人を信用せぬるうだ、ろんな家庭の教育を受くるからだらう日本と支那と何れが好きかと或る學校で一級全体の子供に聞いたら支那が好きと答えた方が多かつたと云ふ話だ、然し之も追々革新するだらう、しかし往來などで道を聞き物を尋ねるには子供が一番よいようだ、また行政や教育の方針上學生の親の

承諾を要するときは子供より理と解かしめてやる  
が最も良策だらだ、沖繩よりも軍人の士官もあ  
れば、大學卒業生もあり現に岸本事務官は琉球の  
人だが頭脳も確實、仕事も立派にやつておる、伊  
波普猷文學士も琉球の人で僕も遇つたが今郷に歸  
り大に郷人に鞭撻を加へつゝある、其人の話の一  
節に曰く琉球人は素大和民族である決して支那よ  
り來りし者でない故に内地人と琉球人は其人種に  
於て同トなり故に日本人として琉人奮起せよ發展  
せよと一々歴史を例証してやつておられた、琉球  
人の利益決して少くないと思ふ。

『これから僕は彼の地が廢藩置縣後年を経るも、  
發達の歩調幼稚なる所以を少し論トて見たいと思  
ふ、則ち其れは全く過去の歴史と行政の方針とが  
、然からしめたど謂ふても過言ではあるまい、ろ  
して彼の地は昔時琉球國と云ふ一の國家組織の許  
に國王があり、大名があり、按司などがあつたも  
ので、土地の人は自然日本國民にして日本國民に  
あらざるが如き考へのものが多かつた、現に十年  
後迄も舊藩家尙侯を押し立てゝ、藩政復興を圖ら  
んとしたものがあつた、今でも皆無とは云へぬろ  
んとしたものがあつた、今でも皆無とは云へぬろ

ふだ、尤も慶長年間薩藩の爲めに占領せられし以  
前は勿論其後も支那(明の時代を最も盛んとする)  
交誼深く、ろして琉球國王が支那使臣と謁見する  
ときなど、支那服裝を用ひ、萬事が支那式であつ  
たるふだ、如何に支那と懇親を結びしかがわかる  
ではないか。

『それから行政の事だが、此は薩藩より在番を立  
て行政を監督せし以來、廢藩置縣後、現に日清戰  
爭當時迄は清國崇拜者が非常に多かつた爲に古來  
の風習が容易に改たまらなかつた、此は必竟何に  
原因するかと云へば、本國が琉球に強制を以て完  
全の行政執行の方法を取らなかつたからだ、で僕  
は不完全の行政を本國がした理由として一二を舉  
げて見んと思ふ、

一、本國を去る遠島にして自然交通不便なりし  
こと、

一、餘り行政が强硬に出づれば支那を始め他外  
國に勢援を依頼するの憂ありしこと、  
以上は過去に於ける不發達の原因と云ふてもよか  
り遙かによかつたが、然しまだくである。

ろう而して現今の理由としては

一、生活の度低きを以て生存競走の感念に乏し  
きこと、

一、在來の舊習慣を固守する性質が却て多く退  
歩的に傾かせしむること、

一、萬般刺擊に遇ふの場合少なきこと、  
なぞではなからふかと思ふ。

『先般琉球に行つて見ると、僕が想像して居つたよ  
り遙かによかつたが、然しまだくである。

『農工商其他事業をやるにも尙優に餘地がある。  
此縣の唯一の富は砂糖で昨年も四百萬圓からの價格に見積もられて居たろふだが例の暴風の爲め百  
萬圓からの損失だつたろふだ、次は泡盛だが、此  
反布は振はぬのである、なせなれば廉價の外來品  
輸入するの結果であるろふな。

『近頃遠洋漁船も二三隻あるらしかつたが此もまだ幼稚なものだらふな。

『農產物で唐芋は到る所にあり四季無いことは決  
してないと云ふて居る而して此唐芋は中等以下の  
常食である。

『山林業の方では各地に日下頻りに樟腦を栽培し  
て居るろふだが、其結果は非常によく四五ヶ年の

中に直徑五六寸となるろふだ、今は樟腦の高價な  
るを知り且土地に適當する事を知つたる爲め楠も  
なか／＼大切にされるが、可笑の話には昔は楠よ  
りこんな金になるものが出来るなんかは知らぬので  
、之を以て材木とし盛んに家屋を建築したものだ  
ろふだ、現に今でも残つて居る所があり、其柱を  
削づれば香ひ馥郁として居るろふだ、

材木としては伊集と云ふ極めて堅い樹木がある。  
『養豚は盛んな方で大抵の家には飼つてれる、不潔  
な話しだが、屋外の雪隱は即ち豚小屋と兼用され  
て居るのである、馴れないでは氣持ちのよいもの  
ではない、僕も一度やつたことがあるが豚が上を  
迎ひでブー／＼云ふて尾を振りつゝ一物の落下を  
待つものゝ如くろしてろこいらの体裁や臭氣やら  
と云ふたら全く御話しにならぬ、それから豚の居  
ない屋外便所は青天井で一寸片側に石垣で目蔭し  
があるばかりだ、雨降りに僕も此所でやつたが傘  
さしたまゝ用を便する云ふ体裁で恰好はどうも  
よくない。あまり話が穢いが事實だから仕方がな

い、ろれから飲用水の事だが、僅かの井戸が山の手の方にあるけれども、少量で不良だ、那覇などには自然に湧出せる清水などは更にない、でどうして彼等は此水の需用を供給して居るかと云へば、例の大甕を地に堀り埋め、此に水を入れ蓋をして貯蓄して居るのである、そして其水は總て天水で、雨の降る度毎に家根より落ちる雷落を集めて該器に流入し込むのである、そこで金持ちになればなる程、水甕を多く所有して居るのだろうな、琉球人は決して生水を飲まぬ必らず此を沸して飲む習慣である此は大に賞すべきことである、却て内地人が上危険である。此に又奇妙の話は、彼等が茶を煎する時の水は新しさを好まぬ事なり、それで幾年かを経て中には十年にもなるのがあるうだ、始めの中は蚊の初蟲など生活するも、年数が立てば子々も棲まぬろうだ、つまり水は腐敗の期を脱して全く死んでしまうのだらう、そして彼等は古い水でなければ茶が甘くないと云ふのである、なんど奇妙な趣好ではないか。それから蚊帳の事だが、蚊は非常に多くしかも四季居るので一年中蚊帳を張

それから僕は少し此土地の俗歌の事を話らん、  
旅や宿泊い、草の葉を枕ら、  
臥ても忘れらぬ、我家の御側。  
と云ふのだ、日本のなら和歌が三十一文字で都々逸が二十六文字だが、右の俗歌は三十字だ、ろして句の字數が八、八、八、六と云ふ具合、此が此の歌ばかりでなく、すべて右の式によるものだろうな、それから琉球特有の芝居もあるが、此は御話にならぬ、脚本には組舞り、能、伏山敵打、等あり、ろして又法條、教條、法式などをあるるんだ、なほ歌を調べるには琉歌集とか沖縄言語集（仲本政世著）などがよいろふだ、僕が彼の地で琉球國史を見た中に歌があつた其を作られた年號を忘れたが面白いから寫して歸つた、讀者の爲め特に紹介してみよふ、

## ◎初 旅（俗に琉球ぶしと云ふ歌）

旅の出て立ち觀音堂。千手觀音伏し拜み。

黄金酌取て立ち別る。

袖に降る露打ち拂ひ。大道松原歩み行く。

弓矢八幡崇元寺。

らぬ事は一夜もない。それから彼の地の墓所だが、此は海上より白色に美事に見ゆて居る様に實際奇麗なもので、内地のものとすると其趣きに相違がある、穴藏を造り其中に幾段の階を設け先祖代々の骨を別々の坪に入れ此所に列べるのである、之を引出して腐肉を洗ひ落し骨のみを骨入（陶器製のもの）に入れられより例の棚に載するのである、彼の地の人は此墓所を無上に尊ぶと同時に面白い事がある、それは金借の低當物となる事であるが、死んで三年間は假埋して置き此期が過ぐれば皆持主に引渡して、他家の代々の骨入が列べられる、彼の地では金貸借上なか／＼信用あるものにしてねくと云ふ事であるなど義理堅い所ではないか、ろして面白く感るのは彼様な風俗の土地柄でありながら少しも宗教心のない事である。

新築地高橋打ち涉て。袖を連ねて諸人の。  
往くも還るもの中の橋。  
沖の寺まで親子兄弟。連れて別かゆる旅衣。  
袖と袖との露涙。』  
舟の續次くくと。舟子勇めて真帆引けば。  
風やまともに午未。』  
復ん回り逢ふ御縁とて。招く扇や三重城。  
ゲヤンバ岬も後に見て。』  
伊平屋渡立つ浪打ち過ぎて。道の島々見渡せば。  
七島渡中や灘安く。』  
立つる烟りは硫黄が島、佐多の岬に走並で、  
エイ／＼彼れに見ゆるは。御海門。  
富士に見違ふ櫻島。』テントン／＼

右は和人唱へて琉客和すとしてあつた

## ◎四季くるち

猪ても目出度や新玉の。春は心も若か反て。

四方の山邊の花盛り。長閑成る世の、春を告げ来る、谷の鶯、ハ／＼

夏は岩間を傳へ来て。瀧津麓に立ち寄れば。  
忘れて面白や。風も涼く、袖に通ひて、夏  
餘所なる、山の下風、ハ々々

秋は尾花が打ち招く。園の籬に咲く菊の。  
花の色々珍しや。錦沙羅沙と思ふはかりの。秋  
の野原や、千草色めく、ハ〜〜

冬は霞の音添ひて車端の桺の咲花は  
色香も深く見て厭かぬ。」花か雪かど  
けん、雪のふる枝に、咲や此花、ハ々々々

右は琉人歌ふて和人舞ふとあり、

是等は俗歌の中有名なものである、まだ外にも澤山あるのだが、そこまで僕の研究が足らなかつたままだ沖縄雑感として思ひ出せばなか／＼澤山あるが此位で筆をとめてれこう（終）

廣告

一文堂主有馬家

紙文具類  
本店ハ京阪地方ヨリ直仕入非常ノ勉強ヲ以テ  
各位ノ需用ニ應ズ

注意

○本會の會員たらんどするものは成るべく左の雑形に據り入會申込書を認められたし

入會申込書

本籍職業 何學年生等

年月日姓  
生名印

尙右の申込書と同時に一ヶ年分(金六十錢)若しくは數ヶ月分を添へ

支局内 加治木同郷會創立事務所  
へ御送付を乞ふ、(申込書の用紙は隨意とす)

○次號より各種の寄稿を歓迎するに同時に讀者の  
聲の一欄を設けはがき集約的極めて簡単なつまり  
一口嘶みたよんな投書を大に歓迎す、  
但し穩當で無い平和を破る様なものは沒書す、

祝電

電

左の電報を寄せられたる小瀧松次郎氏は花城出身法學士にして高等文官試験及第者なり、尙同氏は先般石川縣警務長なりしが目下東京警視廳第一部長に榮轉奉職中なり。

テンヲイノル



明治四十年八月九日印刷  
明治四十年八月十五日發行

鹿兒島縣始良郡加治木村反土九十四番庄

木  
田

一九

編輯者兼本田

發行所 加治木同鄉會創立事務所

廣元縣志

印刷所 鹿兒島新聞社